

創作童話短編集

マッチ売り
と
叶わない破壊



桜井ハルト

【目次】

マッチ売りと叶わない破壊 p.2

マッチ売りと一夜の夢 p.9

マッチ売りと永遠の牢獄 p.19

<あとがき> p.26

アンデルセン童話の一つ【マッチ売りの少女】。

一年最後の日。真冬の街でマッチを売り歩く少女。

売れないマッチ。夜も更け、凍える彼女の体。

少女はマッチに火をともし、体を温めようと試みます。

すると、その炎の中に自分の望む世界が幻影となって現れるのです。

暖炉、ごちそう、クリスマスツリー……そして、家族。炎が消えると、幻影も消える。

夢を追うようにマッチを燃やし続ける少女。

新しい年を迎える朝。路地裏で見つかった少女の亡骸。

笑顔の彼女を彩っていたのは、数百ものマッチの燃えかすだったといいます。

これが【マッチ売りの少女】、その『原作』。

百数十年にわたって語り続けられるこの童話は、いくらかの改変が加えられ、絵本として新しい物語になりつつあります。最後には少女が、幸せになる物語へと……。

ただし、『原作』という名の牢獄は、いつまでもこの物語を閉じ込め続けているのです。

この牢獄の中、マッチ売りの少女はいつも同じ運命をたどってゆきます。

マッチを売りに行き、炎に夢を見て、笑顔の屍となる。

物語に選択の余地はありません。

『原作』に閉じ込められた物語はいつだって不変です。

少女がマッチを売りに行き、炎に夢を見て、笑顔の屍となる。こう決まっているのです。

『原作』の牢獄に、自由や変化の概念は一切ありません。

作家が文字を書き、その表紙を閉じれば、本は永遠の牢獄となるのです。

『原作』に住まうマッチ売りの少女は、今日も牢獄の外を眺めて言うでしょう。

『どんな手段を取ってでも、この運命を変えてみせる』、と――

マッチ売りと叶わない破壊

——私はマッチ売りの少女。

名前は無いわ。この原作にも書かれていない。
これがどういうことかわかるかしら？

.....私は名前を持つことを許されていない。そういうこと。
だから今日も私は相変わらず、『マッチ売りの少女』でいる。

同じ運命を繰り返す、童話の住人。その一人が私。
ああ、運命といっても、あなたたちにとっては唯の物語にすぎないのだけど。

今日も私は、真冬の街へマッチを売りに行く。そして、炎に夢を見て、笑顔の屍となる。
きっと、明日も明後日も、ずっと同じ。同じことの繰り返し。
いい加減、飽き飽きだわ.....。

炎の中に、暖炉やクリスマスツリーが映り出す場面。
あれだって、実際は見飽きてるし、感動だってしない。
何度も見る光景を目の前にして、わざとらしく声を上げて手を合わせ心を温める私を見て、
あなたは馬鹿らしいと思うかしら？
まあ、あなたも童話の住人になってみればよくわかるわ。『原作』の住人に、ね。
自由なんかありはしない。決められた運命を繰り返すだけだもの。
まるで囚人。まるで、ここは牢獄。

最近絵本というものがあって、その中の私はハッピーエンドを迎えるらしいじゃない。
幸福な運命を繰り返す彼女が羨ましいわ。本当に。
私だって、ハッピーとは言わないまでも、違う人生を歩んでみたいのよ。

良くも悪くも、今の物語と異なってさえいればいい。

ああ、もう時間だわ。本が開かれる。
また、街に出て行かないと。
そうそう……このマッチを持ってね。
置いていくことのできない大事な売り物。
だって私、『マッチ売りの少女』だもの。
これに火をつけて……そうだ、私にいい考えがある。

……ふふふっ、今回はきつとうまくいくわ。
この運命は、絶対に変えてみせる――

――場面は真冬の街

通り過ぎる人々。乾いた冷たい風。
年末の慌ただしさから、マッチを買う人はもちろん、彼女に目を向ける者は一人としていない。
マッチを入れたかごを手に街をさまよう少女――

「さあて、始めましょうか」

彼女は笑みを浮かべると、マッチを擦る。
小さな炎のともったそれを、足元に落とした。
地面に落とされた火種は、風にあおられ蛍の光のように明滅している。
少女は、そのまま路地裏を歩いてゆく。

「1本……2本……3本……」

少女は火のついたマッチを落としながら、家屋の後ろを歩いてゆく。
夜の路地裏。人影はない。
最初の一本が落とされた家の壁には、もう炎が這い始めている。
その火を、冷たい風があおる。

マッチ売りと叶わない破壊（４）

「４本……５本……６本……」

彼女は笑顔で歩いてゆく。

月も陰る夜の道に、少しずつ明るさが宿る。

地面に落とされたマッチの炎は、家屋を背後から焦がしていった。

乾いた風が強い。

少女は歌を口ずさみながらマッチを擦り、抛る。

最初は一本ずつだったが、徐々に２本ずつ、５本ずつとまとめて火をつけ始めた。

遠くの家には静かに炎が這っている。

「ふふふっ。これで、私の人生は変わるはず。

でも、これだと本当の牢獄に入れられるかもしれないわね」

そう微笑みながらマッチを擦った瞬間。

強風が、彼女の手元から火のついたマッチの束をさらっていった。

小さなたいまつは、少女の前に散らばっていた藁を燃え上がらせる。

驚いて飛び退く彼女。

乾いた藁は一瞬にして炎を成長させ、その火の先は少女の鼻をかすめた。

振り返る彼女。

「嘘……」

後ろはすでに、先程まいたマッチの炎で燃え上がっている。

狭い路地裏の両側は燃え上がり、彼女は炎に囲まれる形になった。

炎の向こうで、人々の叫び声が聞こえる。

煙にまかれ身をすくめる少女。

吸い込んだ空気が熱く彼女の胸を焦がした。

逃げ場がないのは一目瞭然だった。

乾いた風が炎を巻き上げる。

「げほっ……ごほっ……」

痛む頭。意識はすでに朦朧としかけていた。
頭痛と共に、脳裏に幻影が映し出される。

暖かい暖炉。

「嫌だわ……」

食卓に並ぶごちそう。

「これって、また同じ……」

クリスマスツリー。

「ごほっ……こんな幻影」

そして、家族。

「……見たく、ないのに……」

次々と映し出される夢の幻影。

痛みを伴い、彼女の頭を駆け巡っていく。

遠くで、人々の叫び声が聞こえる。

消火作業か、所々で水を打つ音も聞こえてくる。

炎に囲まれた中、少女はすでに横たわっていた。

「……まあ、いいわ……」

壁が崩れる音。

「これで、変わったはずよ……」

燃え上がる炎。巻き上がる煙。

路地の中央で、地面に横たわる彼女は静かに目を閉じた。

口の端を引き上げ、微笑む。

「少し、苦しい……けど……私の運命は、これで……変わったはず……」

――場面は真冬の街

通り過ぎる人々。乾いた冷たい風。
先日火災のあった路地裏の消火は、もう済んでいた。
家屋の壁は一面焦がされ、地面は黒く焼けていた。

火事の原因は特定されなかった。
マッチの細い棒は、当たりの燃えかすと完全に同化していた。

被害者は、少女が一人。
狭い路地裏の中央に横たわっているのが発見された。
黒く焼け焦げた少女の屍の周りには、彼女が持っていたのであろう、かごの残骸が
散らばっているだけだった。細かな木の破片は、近くから灰が飛んできたものと
解釈されたのだった。
肺まで焦がされた少女の亡骸。
黒くすすけた、彼女の顔。

その顔はかすかに笑みを浮かべているのだった。



次に本が開かれるとき、彼女が歩く運命の道は元通り。
マッチを売りに行き、炎に夢を見て、笑顔の屍となる。

このしばしの幻想は、登場人物の夢なのでしょうか。
それとも、わたしたちの見る想像にすぎないのでしょうか。
どちらにしても、『原作』は変わらないまま。鋳型のようにそこにあるだけ。
少女のようにこれを壊そうと試みても、無駄なことです。
結局、同じ形の運命が出来上がるだけ……

運命を囲むこの鋳型こそが、物語の変化を許さない永遠の牢獄なのです――

マッチ売りと一夜の夢（1）

アンデルセン童話の一つ【マッチ売りの少女】。

一年最後の日。真冬の街でマッチを売り歩く少女。

売れないマッチ。夜も更け、凍える彼女の体。

少女はマッチに火をともし、体を温めようと試みます。

すると、その炎の中に自分の望む世界が幻影となって現れるのです。

暖炉、ごちそう、クリスマスツリー……そして、家族。炎が消えると、幻影も消える。

夢を追うようにマッチを燃やし続ける少女。

新しい年を迎える朝。路地裏で見つかった少女の亡骸。

笑顔の彼女を彩っていたのは、数百ものマッチの燃えかすだったといえます。

これが【マッチ売りの少女】、その『原作』。

百数十年にわたって語り続けられるこの童話は、いくらかの改変が加えられ、絵本として新しい物語になりつつあります。最後には少女が、幸せになる物語へと……。

ただし、『原作』という名の牢獄は、いつまでもこの物語を閉じ込め続けているのです。

この牢獄の中、マッチ売りの少女はいつも同じ運命をたどってゆきます。

マッチを売りに行き、炎に夢を見て、笑顔の屍となる。

物語に選択の余地はありません。

『原作』に閉じ込められた物語はいつだって不変です。

少女がマッチを売りに行き、炎に夢を見て、笑顔の屍となる。こう決まっているのです。

『原作』の牢獄に、自由や変化の概念は一切ありません。

作家が文字を書き、その表紙を閉じれば、本は永遠の牢獄となるのです。

『原作』に住まうマッチ売りの少女は、今日も牢獄の外を眺めて想うでしょう。

『私にも、いつかきっと王子様が迎えに来てくれるはず』、と――

マッチ売りと一夜の夢想

――私はマッチ売りの少女。

同じ運命を繰り返す、童話の住人。その一人が私。

ああ、運命といっても、あなたたちにとっては唯の物語にすぎないのだけど。

今日も私は、真冬の街へマッチを売りに行く。そして、炎に夢を見て、笑顔の屍となる。

きっと、明日も明後日も、ずっと同じ。同じことの繰り返し。

いい加減、飽き飽きだわ……。

他の童話の中には、王子様というものが登場するらしいじゃない。

良くも悪くも、今の物語と異なってさえいればいい。そう思ってるわ。

でも、一度くらい、私の物語にも王子様が出てきてもいいはず。そうでしょう？

私を悲劇から助け出してくれるような、素敵王子様。

そして、麗しのロマンス。

だってマッチを燃やして夢見る物語だなんて、地味よ。

華やかな……そう、舞踏会とかはどうかしら。

こんな見栄えのしない服なんかじゃなくて、もっと豪華絢爛なドレスを着たりして。

まあ、これは全部、私の夢想にすぎないのだけれど……。

ああ、もう時間だわ。本が開かれる。

……ああ、他の物語で王子様と呼ばれている方々へ

どんな人でもいいわ。

私の物語にいらっしゃって、私の運命に花を添えて下さらないかしら――？

マッチ売りと一夜の夢 (3)

――場面は真冬の街

通り過ぎる人々。乾いた冷たい風。

年末の慌ただしさから、マッチを買う人はもちろん、彼女に目を向ける者は一人としていない

。
マッチを入れたかごを手に街をさまよう少女――

「やっぱり、売れない……。」

このままじゃ、また、このマッチを擦って幻影を見ることになるわ」

肥え太った男爵にマッチを差し出す。

「すみません。マッチはいかがですか？」

「マッチだあ？ そんなもの、いらんね……」

男は、ふんと鼻を鳴らすと、邪魔だと言わんばかりに少女を突き飛ばした。

よろめき倒れそうになる彼女。その瞬間、散らばりそうになったかごの

マッチ箱と共に抱き留められた。

少女は驚き、背後を振り向く。

そこには、一人の青年が深緑の外套を着て立っていた。

外套の襟や裾には金色の刺繍。首や腕にきらめく貴金属。美しい顔に白い歯。

彼女は、彼が自分の呼びかけに答えた王子様だと確信すると、

心の中で『イエスッ、イエスッ！』とガッツポーズをするのだった。すぐさま声色を変える。

「あ、ありがとうございました」

「大丈夫？ 怪我はないかい？」

「はい、大丈夫です。あの……お礼に、これを」

お礼と言っても、少女にはマッチの他に人に上げるようなものはない。

白い手で小さなマッチ箱を差し出す。彼は、箱を持つ彼女の手を両手で包んで言った。

「いや、礼には及ばないさ。それに、マッチは君の大事な売り物なんだろう？」

「でも、私、人にあげられるものなんて他にないんです」

「そうだな……それじゃ、一緒に夕飯に付き合ってくれないか？」

「はい、喜んでっ！！」

彼の案内で着いた、超一流レストラン。

豪華絢爛な衣装を身にまとった貴族夫人が歩き、公爵たちと談笑している。

大きな暖炉は部屋を十分に暖め、真冬を感じさせなかった。

テーブルの上には燭台の明かり。

そして数えきれないほどの料理が敷き詰められている。

鶏の丸焼きにはオレンジのソースがかかり、子羊のソテーにはハーブが散らしてあった。

宝石のような果実の横には、色とりどりのケーキが並んでいる。

すべての料理と客を、頭上のきらめくシャンデリアが照らしていた。

彼女がおどおどしていると、彼はウェイトレスを呼びつけた。

「すまないが君、彼女に似合うドレスを頼む」

「はい。かしこまりました。それでは、お嬢様こちらへ」

「あの、私、お金持ってないんですけど……」

怪訝な表情をするウェイトレスの前で、彼は笑った。

「気にすることはないさ。もちろん、僕が払わせてもらうよ」

ウェイトレスに連れられ、元のフロアに戻る。

ドレスにあしらわれた、たくさんの花飾りが歩くたびに揺れた。

煌びやかなドレスに着替えた私を見て、深緑の王子は両手を上げた。

「おお、美しい。待っていたよ、お姫様」

「いやです。お姫様だなんて。私は唯のマッチ売り。それに、待っていたのはこちらの方です。

王子様が……あなたが迎えに来てくれるのをずっと待っていました」

「君さえよければ、マッチ売りなど止めて、僕の城に来てほしい」

「あなたの、お城に……？」

王子に手を握られ、頬を赤く染める少女。

誘いへの返答はもう決めていた。

「もちろー」

彼女がそう言いかけた瞬間、大男がその手を奪った。
少女はそのまま大男に抱き寄せられる。
ものすごい力だった。

「そうはいくか。彼女は、俺様の姫だ」

そういう男の声は低く、彼女の耳に響いた。
彼は大きな体を黒のタキシードに包み、赤い蝶ネクタイを付けている。
毛先の乱れた金の髪は肉食獣の鬣（たてがみ）を想起させた。
深緑の王子が、その黄色い眼で鋭くにらみつける。

「彼女を放せ。お前のような野獣じみた大男に渡すわけにはいかない」
「ふふ、野獣じみていようと、俺様も王子。彼女と結ばれる権利がある」
「戯言を……」
「ちょっと、これはどういうこと？」
「おお、姫よ。驚かせてしまって申し訳ない。俺は、野獣の王子。
こんな、ひ弱なカエルのような男など放っておいて、俺の城へ来てください」
「カエルだと。貴様、僕を侮辱するつもりか！」
「真実を述べたまでだ。決闘なら受けるぞ。結果は目に見えているがな」

野獣の王子は肩をいからせると、にやりと笑った。
ごつごつとした手は、彼女の肩をしっかりとつかんでいた。
……と、次の瞬間、その手の甲を鞭が打った。
彼はうなり声を上げて怯み、その隙を見て少女は彼の手から逃れた。
彼女の眼の前には、白タイツにかぼちゃパンツの青年。
その手には短い鞭を持っていた。

「うぐう……」
「あんたのやっていることは、盗賊か何かと同じだよ」
「俺様が盗賊だと！？ どの馬の骨かはわからんが、許さんぞ」
「馬の骨じゃない。私は王子だ。姫の魔法が解ける前に、迎えに来たのさ」

彼は腕の時計を見る。

「大丈夫。まだ、12時までには時間がある。さあ、行こうか、姫」

「え、私.....別に魔法をかけられたわけじゃ。『マッチ売りの少女』にそんな設定ないし」

「おいおい、何を言ってるんだ。君はその設定が嫌で、こうして俺たちに呼びかけたんだろう？」

「.....あ！ そう、そうだったわ。突然のことが多すぎて、私ったら、少し混乱していたのね。そう、あなたたちに呼びかけたのは、この私」

「そして、君の運命を変え、君の人生に花を添える王子.....それが、この私だ。さあ、行こう！」

「ええ、行きましょう！」

「待てっ！ 白タイツ！」

声を上げたのは、深緑の王子だった。

その手には、細い剣が光る。

フロアに悲鳴が起こった。

「彼女を連れて行きたいのならば、僕を倒してからにするがいい」

「剣を収めて、おとなしく家に帰ることだな。」

そうすれば、今私のことを『白タイツ』と呼んだことは許してやる」

「許してもらわなくても結構だ。早く、君も剣を抜きたまえ」

「お前ら、勝手に盛り上がってんじゃねえぞ」

太い指を鳴らし、野獣の王子が歩み出る。

周りの客はあわてて壁際に逃げた。

「姫をお持ち帰りするのは、この俺様だ」

「俺様だの、お持ち帰りだの言っている男に、彼女はやれない」

「私も同感だ」

「白タイツに言われたくはない」

「ふふふ.....わかった、やってやろうじゃないか！」

野獣の王子の言葉に、白タイツの王子は腰の剣を引き抜いた。

金属のかする音が響く。

深緑の王子は剣を構え、野獣の王子は身をかがめた。

壁際で他の客と一緒に、その様子を見守る少女。

「勝ったやつが、姫をお持ち帰りできる……いいな」

「結局、お前も言ってんじゃねえか。白タイツ」

「黙れっ！　まずはお前のその口から切り刻んでやるっ！」

決闘が始まると、レストラン内は一層騒がしくなった。

最初は悲鳴だけであったが、徐々に歓声も交じってくる。

興奮した客たちは、大声を上げて彼らの決闘をあおり始めた。

「おおっ！　もっと、やれい！」

「きゃあああ！　野獣様、頑張ってえ——！」

「いやあ、負けないで！」

「もっと、酒もってこいっ」

「いけっ！　やっちゃえっ！　そこよっ！」

「カエル様、危ないっ、後ろっ！」

騒ぎの元凶ともいえる少女は、真剣な目つきで決闘に見入っていた。

その彼女の腕が突然引かれる。

彼女が振り向くと、王冠を戴いた白い髪の青年が人差し指を口に当てていた。

「かわいいお姫様。お迎えに上がりました」

「あなたは……？」

「ぼくは、白馬の王子。ご安心を、馬は裏口にまわしてあります。

……さあ、今のうちに。こんな、野蛮人たちは放っておいて、ぼくの城へ参りましょう」

彼が話すたびに、爽やかな果実の香りが辺りを漂った。

少女は黙って頷くと、彼の手にひかれ歩いていく。

しかし、彼女たちを見つけ、声を上げる者がいた。

少女が声の方向を見ると、数十人もの青年たちが行く手を阻んでいた。

そのそれぞれが、豪華な衣装を身にまとい、杖を持ち、マントをかけている者もいる。

つまり、彼らも彼女の呼びかけで集まった王子なのだった。

「抜け駆けしようってのかい？　白馬の王子さんよおう！」

「姑息な真似は、王子としては見逃せないな……」

「お前みてえなやつより、オラのほうが彼女にふさわしいべ」

白馬の王子は、剣を引き抜き振りかざした。

「しょうがないな。怪我をしても知らないよ」

「ふん、小僧が……笑わせるなよ」

「生意気言ってるのも、今のうちやで！」

「お前さんは、おとなしく馬の世話でもしているんだなっ」

あっという間に、レストランは怒号に包まれ、煙沸き立つ戦場となった。

王子たちが互いを殴り合い、切りあうなかで、調度品のほぼすべては床に転がり壊れた。

カーテンや絵画も破れ、テーブルの上には料理が踏みつぶされている。

自分のための戦いとはいえ、少女はただただ茫然としているしかなかった。

目の前には、深緑の王子が額から血を流し、野獣の王子が拳を赤く染めている。

白馬の王子は冠を投げつけて相手をひるませ、白タイツは鶏の丸焼きを振り回して応戦する。

血みどろの争いに発展した喜劇を眺めている少女の目に、

白い煙が立ち上るテーブルが見えた。倒れた燭台の火が燃え移ったのだ。

レストランにいる人間は、客も王子たちも一人残らず半狂乱になっており、

火事に気付いている者はいない。それは、彼女が火事だと叫んでも同じだった。

少女の喉から振り絞られた声は、喧騒の中に霧のように散って消える。

炎は勢いを増し、今度は人々を混乱させることになった。

火事に気が付いた客たちが出入り口をふさぎ、室内にいる者たちは

炎の中に閉じ込められる形になってしまったのだ。

今となっては、客も王子もあつたものではない。

ただただ、炎にまかれて苦しむ影があるのみ。

それは、少女も同じ――

「ごほっ、どうして……こんなことに」

炎の中に、夢の幻影。

煙を吸い込んだ胸が熱い。頭が痛い。

「もう、暖炉も、ごちそうも……見えなくていいのに」

必死で、頭の中の幻影を振り払う。
気を失うまでに、もう時間は残されていなかった。

「でも……もしかして……」

焼け焦げるにおい。
聞こえるのは悲鳴ではなく、炎の音だけだった。

「私をここから……炎の中から、助け出してくれる……王子様が……」

――翌日になり、消火作業が終わると、昨夜の喧騒が嘘のように静かになった。
焼け跡に残った屍。彼女の口元は笑い、その周囲には燃え尽きた王子達が横たわっていたのだ
った。



次に本が開かれるとき、彼女が歩く運命の道は元通り。
マッチを売りに行き、炎に夢を見て、笑顔の屍となる。

このしばしの幻想は、マッチ売りの少女である彼女の夢だったのでしょ
う。
ただ、一夜の夢のごとくとは、よく言ったものです。

もちろん、『原作』は変わらないまま。
今日も登場人物をしっかりと捕えています。

牢獄の中でいくら騒ごうとも、それは所詮
囚人たちの戯言にすぎないので――

マッチ売りと永遠の牢獄（1）

アンデルセン童話の一つ【マッチ売りの少女】。

一年最後の日。真冬の街でマッチを売り歩く少女。

売れないマッチ。夜も更け、凍える彼女の体。

少女はマッチに火をともし、体を温めようと試みます。

すると、その炎の中に自分の望む世界が幻影となって現れるのです。

暖炉、ごちそう、クリスマスツリー……そして、家族。炎が消えると、幻影も消える。

夢を追うようにマッチを燃やし続ける少女。

新しい年を迎える朝。路地裏で見つかった少女の亡骸。

笑顔の彼女を彩っていたのは、数百ものマッチの燃えかすだったといいます。

これが【マッチ売りの少女】、その『原作』。

現在、この童話は、いくらかの改変が加えられ、絵本として新しい物語になりつつあります。

最後には少女が幸せになる物語。皆さんが知っている【マッチ売りの少女】は、

そうだったのではないのでしょうか。

ただし、『原作』という名の牢獄は、いつまでもこの物語を閉じ込め続けているのです。

マッチを売りに行き、炎に夢を見て、笑顔の屍となる。

牢獄の中、マッチ売りの少女はいつも同じ運命をたどってゆきます。

少女がマッチを売りに行き、炎に夢を見て、笑顔の屍となる。

そう決まっているのです。

『原作』に住まうマッチ売りの少女は、今日も牢獄の外を眺めて嘆くでしょう。

『いつまでこの運命を繰り返せばいいの』、と――

マッチ売りと永遠の牢獄

――私はマッチ売りの少女。

名前は、無いわ。この原作にも書かれていない。
これがどういうことかわかるかしら？

.....私は名前を持つことを許されていない。そういうこと。
だから今日も私は相変わらず、『マッチ売りの少女』でいる。

同じ運命を繰り返す、童話の住人。その一人が私。
ああ、運命といっても、あなたたちにとっては唯の物語にすぎないのだけど。

今日も私は、真冬の街へマッチを売りに行く。そして、炎に夢を見て、笑顔の屍となる。
きっと、明日も明後日も、ずっと同じ。同じことの繰り返し。いい加減、飽き飽きだわ.....。
自由なんかまるでない。決められた運命を繰り返すだけだもの。
まるで囚人。まるで、ここは牢獄。
あなたに私の気持ちがわかるかしら？
.....わからないわよね。

ああ、もう時間だわ。本が開かれる。また、街に出て行かないと。

繰り返すとわかっていても変えられない運命（ものがたり）。
何度も抵抗を重ねてきた私には、もうその気力も残っていない。
ただひたすら歩かされてゆく。同じ道を。変わらない物語（うんめい）を。
牢獄の鉄格子。
それを叩くことだって今はしたくない。
どうせ、出られやしないのだから。

誰でもいい。
ここから私を、自由にして――

――場面は真冬の街

通り過ぎる人々。乾いた冷たい風。

年末の慌ただしさから、マッチを買う人はもちろん、彼女に目を向ける者は一人としていない

。
マッチを入れたかごを手に街をさまよう少女――

「マッチはいかがですか？」

紳士はあからさまに目をそむけた。

「マッチはいかがですか？」

「いらないわよ……」

老婦人は眉間にしわを寄せる。

「マッチはいかがですか？」

「ごめんね。買ってあげられないわ」

親子連れの母親が優しく言った。

家族のいない彼女は、さびしそうな眼をしていた。

行き過ぎるその三人を、少女は黙ってしばらく見ていた。

街を歩けば、民家から料理のにおいが漂ってくる。

おいしそうな香りが漂ってくるたびに少女は目を細め、次の瞬間にはため息をついて再び歩き出すのだった。

少女は、凍えるような風が吹く中、場所を変えてゆく。

駅の前に立ち、列車に乗る客、降りてくる客に声をかけ始めた。

やはりここでも、相手にしてくれる人は少ない。

向こうへ行けと手でジェスチャする者もいる。

薄い布を肩にかけた彼女は、白い息で両手を温めた。

今日もまた、マッチを買ってくれる者はいないようだ。

マッチ売りと永遠の牢獄（４）

少女はマッチ箱のかごを手に、いつもの路地裏にやって来た。
人通りの少ない道に、猫が歩いている。

彼女はおもむろにマッチを擦ると、その小さな炎に手をかざした。
火が温かいのか、彼女の表情が和らいだ。
今日も、少女はその小さな炎の中に幻影を見つけ驚く。
小さな火の中に現れた夢の幻影。
暖炉。ごちそう。クリスマスツリー。……そして、家族。
炎を見つめ笑顔になる彼女。
箱からマッチを取り出しては擦り、炎を眺めてはその燃えかすを捨てていく。
繰り返すごとにかごのマッチは減っていく。
少女の足もとは、たちまち燃えかすでいっぱいになった。

路地裏を冷たい風が吹き抜ける。
マッチの炎で暖を取る彼女の肩が、小さく震えた。
笑顔で幻影を眺めるその顔に、悲しい色が見え隠れする。

明日になれば、彼女はこの路地裏で屍になっているだろう。
笑顔の彼女を彩っているのは、もちろん数百ものマッチの燃えかすだ……。

少女はまだ、マッチを燃やし続けていた。

――ふと、後ろに視線を感じ振り向くと、そこには一人の老婆が立っていた。
こちらを指さしている。あたりを見回しても他には誰もいない。
老婆が静かに口を開いた。

「お前さん。いつも、そうして見ているだけだねえ」

老婆の声はかすれ、風の音にかき消されてしまいそうなほどに小さい。
しかし、その言葉は明確に耳に届いてきた。

「そうやっていつも、街に行き、駅に行き、路地裏の陰に身をひそめて見ているんだろう？
あの、マッチ売りの少女を……」

廃管の陰から身を乗り出すと、向こうで少女がまだマッチを擦っているのが見えた。
彼女の手元で、小さな炎が揺らめいている。
向こうからこちらは見えないだろう。
再び老婆の方に向き直る。

「あんたは一体何者だい？ この物語の作者かい？ それともこの物語を読んでいる者かい？」

暗闇で見る彼女の表情は白い。
上品に毛糸の外套を羽織っているが、その腰は曲がっていた。
下からねめつけるように見上げてくる。

「まあ、どちらでもいいがね。……お前さんは傍観しているのだろう？
彼女がいつものように、幻影に酔いしれ、マッチを使い切り、冷たくなっていく様子を」

老婆はそう言って路地裏の少女を眺めた。

「……まったく、かわいそうな子だよ。毎回毎回、同じ人生の繰り返しさ。
まあ、登場人物の名にも上がらない私のような老婆が言うのも、おかしい話だけれどねえ。
作者が亡くなってからというもの、あの子の運命はしっかりと固定されちゃったのさ。
この物語の中に。なにしろ、原作だからね。内容はいつまでも変わらない」

彼女は再びこちらを見てくる。

冷たい風が吹き抜けた。

「閉じ込められちゃったのさ。この本の牢獄に。

どんなにあがいても、最後にはその物語にからめ捕られて元通り。

同じ話の繰り返し。……そういうわけさ」

老婆は続ける。

「でもね、ひとつだけ彼女をこの牢獄から解き放つ方法があるのさ。お前さん、知ってるかい？

ないわけじゃあない。言うのは簡単なんだよ。

……それはねえ、世界中の人々から、この物語の記憶をすべて消し去ってしまうことなんだよ

。

原作の記憶をすべて失ったとき、はじめて彼女は自由になれる。そういうことなのさ」

老婆はしわに埋まった口で笑う。

「つまるところ……彼女が自由になることは、不可能だってことだねえ。

世界中の人々に散らばる記憶を消す？ 出来ると思うかい？

一人の記憶でもそうさ。

例えばお前さん、【マッチ売りの少女】の原作が、

『マッチを売りに行き、炎に夢を見て、笑顔の屍となる』話だ。と、こう言われたとするね？

はい、今すぐこれを忘れてください……これがなかなか難しいのさ。人によってはすぐに忘れられる。

忘れられない人はずうっと忘れられない。そういうもんさ。それに、忘れたと思っけていても、不意に

きっかけが与えられれば、浮き上がるようにして記憶は甦る。

まあ、彼女にとっての幸いは、現代の子供たちが今の新しい【マッチ売りの少女】の物語しか

、

知らないようになりつつあることかねえ……。

お前さんにはわからないだろうが、幸せな物語の登場人物に生まれることは、至上の幸福なのさ。

私たち物語の住人にとってはね。逆もまたしかり、悲劇に生まれた登場人物が、同じ運命を繰り返すこと……それが、どういうことかわかるかい？

……おやおや、見てごらんよ。

彼女は、今日も立派に仕事を終えたようだね」

老婆が指差す路地裏の向こうを見ると、少女が横たわっているのが見えた。
空を見上げると、夜は白み始めていた。

「まあ、そんな顔をしないでおくれよ。
私だって、お前さんを嫌な気分になせに来たわけじゃないんだ。
でも、そうだねえ……こういったことが嫌なら、
『原作』に近づくことはもうやめた方がいいかもしれないねえ。」

興味本位に『原作』の牢獄をのぞけば最後。
決して助けることのできない登場人物たちの
悲痛な姿を目の当たりにするかもしれないんだから――」

<あとがき>

【創作童話短編集・マッチ売りと叶わない破壊】を読んでいただき、ありがとうございました！
小説家志望でもない単なる大学生が趣味(?)として書いたこの小説...
読みづらい部分が多々あったかと思いますが、なにとぞご容赦ください。

暗い展開、救いのない結末...そして、ふざけた王子たち(笑)...
決して出来のいい物語とは言えないかもしれませんが、
一言でも感想・コメントを頂けると嬉しいです。

(“読者登録・お気に入り登録”等もよろしくお願いします！)

マッチ売りと叶わない破壊

<http://p.booklog.jp/book/42435>

著者：桜井ハルト

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/spring-rabbit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/42435>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/42435>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.